

『歴史を見つめ直す』～ 多角的観点から普遍性の烙印を押す ～

2026年4月28日 東京大学のキャンパスにある伊藤国際学術センターでの 筆者が代表を務める『南原繁研究会』の『南原繁研究会編集委員会』 に出席した。 南原繁研究会編『敗戦後 80 年、戦後日本の歴史を見つめ直す』の出版が決定された（6月30日発行予定 発行所：横濱大氣堂）。

筆者は『まえがき』で、【2025年11月3日（文化の日）、日本教育会館（東京都千代田区一橋）において、第22回南原繁シンポジウム『敗戦後 80 年、戦後日本の歴史を見つめ直す』（添付）が開催されました。 — 私は、2004年にスタートした南原繁研究会（初代代表・鴨下重彦先生：1943—2011；東京大学名誉教授、国立国際医療センター名誉総長）、第2代代表・加藤節先生：成蹊大学名誉教授）の3代目の代表を、2019年『南原繁（1889—1974）生誕130周年』を祝し、仰せつかりました。1945年8月15日に敗戦した日本は、2025年に『敗戦後 80 年』という節目の年を迎えました。 — 『シンポジウム』では、日本国憲法や教育基本法の制定など、戦後日本の設計に深く関わった南原繁が果たした『歴史的役割』について、多角的観点から再考します。 戦後日本が歩んできた『80年という歴史』に思いを馳せ、 — 私は、『1人で 部屋で 静かに1時間読書する習慣をつけよ！』と教わった。 — 私の読書遍歴は、『内村鑑三（1861—1930）、新渡戸稲造（1862—1933）、南原繁、矢内原忠雄（1893—1961）』であった。 南原繁は、『教養ある人間とは、自分のあらゆる行動に普遍性の烙印を押すことであり、自己の特殊性を放棄して普遍的な原則に従って行為する人間のことであり、 — 『時代を動かすリーダーの清々しい胆力』としての『人間の知恵と洞察とともに、自由にして勇氣ある行動』（南原繁著『新渡戸稲造先生』）という文章が鮮明に思い出される。 — そして戦後、1945年12月東京帝国大学総長に就任、国家の再建を呼びかけ、戦後改革の理想を掲げて、ことに教育改革に主導的役割を果たして行く。 — 】と記述した。

『練られた品性と綽々たる余裕』は『教育の真髄』であり【『目的は高い理想に置き、それに到達する道は臨機応変に取るべし』&『最も必要なことは、常に志を忘れないよう心にかけて記憶することである』（新渡戸稲造）】を痛感する日々である。

【私たちの出会うことがらには、出来ることと できないことがあるが、出来ることは 頼まれれば こばむものではない、いやとは言わない】が【本書『敗戦後 80 年、戦後日本の歴史を見つめ直す』の役割・使命】では なかろうか！

第22回 南原繁シンポジウム

敗戦後 80 年、戦後日本の歴史を見つめ直す

1945年に敗戦した日本は、今年2025年に「敗戦後80年」という節目の年を迎えました。南原繁がもし生きていたら、いまの日本や世界の現状をどのように評価するでしょうか。日本国憲法や教育基本法の制定など、戦後日本の設計に深く関わった南原繁が



果たした「歴史的役割」について、特に「宗教」との関係に焦点を当てながら、多角的観点から再考します。

第一部「基調講演」では、戦後日本の歴史を問い直す研究を精力的に続けてこられた歴史家であり、日本宗教史・戦後思想史・占領期文化史がご専門の磯前順一氏（国際日本文化研究センター教授）をお招きし、敗戦直後という時期において南原繁や岸本英夫らが、GHQや日本の宗教政策の策定にどのような形で関わっていたのか、本邦初公開の資料なども駆使しながら、多面的かつ実証的観点からお話頂きます。

第二部「パネル・ディスカッション」では、南原繁研究会の会員である三名のパネリストに、それぞれの問題関心に基づいて、「戦後日本の歴史を問い直す」観点から、論じて頂きます。戦後日本が歩んできた80年という「歴史」に思いを馳せ、戦後日本社会に対して「宗教」が果たした役割について見つめ直すとともに、「歴史」と「宗教」という観点から南原繁を再考するシンポジウムとなることを願っています。

日時： 2025年11月3日（月・文化の日）13:00～17:00（開場 12:15）

場所： 日本教育会館 7階中会議室

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2 電話 03-3230-2831

[ズームミーティング方式でオンラインでも参加いただけます。](#)

参加費： 会場での参加 一般 1,500円、学生 700円

オンラインでの参加 無料

いずれの参加もお申し込みが必要です。（裏面ご参照）

主催： 南原繁研究会（代表 樋野興夫 順天堂大学名誉教授）

後援： 岩波書店、学士会、東京大学出版会、公共哲学ネットワーク

協賛： 富山県立小杉高等学校同窓会